

町民文芸



只見短歌会 七月詠草

透析に慣れたる夫が早起きし持ちゆく紫陽花選び切りみつ
古川 英子

若き等に従ひて来し避難所で老いら寄り添ひ炊き出し頂く
馬場 八智

暑き日に一陣の風吹きてきつどこかで激しき雨の降るらし
小倉 キミ子

離れ住む独り暮らしの姉からの用事の電話もついぞ長引く
関谷 登美子

只見富士窓を額にしそれぞれの色を替へて四季は移らふ
新国 由紀子

幼子が摘みたる花を愛しみ水をやる都度顔が綻ぶ
目黒 富子

病む夫の若き日の友訪ね来てわづか十日余計報の届く
渡部 ゆき子

テレビ見て声出し笑ふ孫見れば厨に立ちゐる我が手止まるも
渡部 ヨリ子

車椅子にひ孫を乗せてりハビリと家うち歩く笑はせながら
新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会 八月例会

知りたくて知られたくないサングラス
十年も過ぎてうるさき冷蔵庫
都

盆唄や小さき輪となり過疎の町
若き日も今もこの道合歡の花
弘子

もう少し登る途中の蟬の殻
立秋の朝戸の風の入りけり
恒夫

つんつんと刈葱の伸びし朝かな
かかえたる胸に西瓜の日の温み
礼

短夜やみじかく聞ゆ三味の音
日に三度シャワーを浴びて又シャワー
穂

盆過ぎし村の灯りの元通り
レジ横の西瓜安売り悩み過ぐ
修一

野佛の傍に勿忘草の花
夏休みピザ焼く窯の煙立つ
敦子

待ちきれず新じゃが探る畝温し
この固き大地を穿つ薯の丈
さちを

亡き人のセピアの写真蟬しぐれ
夏雲や敗戦投手の涙かな
信



目黒十一 指導